英語で復興伝えたい

大槌高生19人

米国視察へ来月出発

スピーチ練習励む

大槌町の大槌高（山形守平校長、生徒294人）1、2年生19人は3月3日、外務省の青少年交流事業を活用し米国視察へ出発する。現地の中学校などを訪れ、同町の被災状況を英語で発表する予定だ。東日本大震災で大きな被害を受けた同町だが、生徒たちは「被災地の今とこれからを伝えたい」とスピーチ練習に励んでいる。

英語でスピーチ練習に励む大槌高の生徒

「発音もスピードも大丈夫。もう少し身ぶりをつけてみたらいいね」。生徒たちは20日夜、同町上町の上町ふれあいセンターで、インターネット電話「スカイプ」を使い英語教育支援を行うメリルリンチ日本証券（東京都）の社員を相手に発表練習を行った。

4グループに分かれて、被災した町の現状や復興計画などを英語で紹介する予定。発表用資料は英訳も含め生徒たちが作製した。菅野友也君（2年）は「答えるのは大変だけど、現地の生徒からたくさん質問がくればいい」と期待する。

視察は外務省の「キズナ強化プロジェクト」の一環で、国際交流基金が主催。同校のほか本県内陸の3校（不来方、前沢、専大北上高）、青森県の2校（三沢高、八戸工業高専）などから生徒・学生144人が参加する。

3月4日の都内でのオリエンテーションを経て同5日に出国、16日に帰国する予定。シアトルやサンフランシスコなど北米西部を巡り、地域住民との交流やホームステイなども経験する。

海外は初めてという兼沢依子さん（2年）は「発表の準備をする中で現地に行くのが楽しみになってきた。復興に向けてみんなが頑張っていることを伝えたい」と意気込んでいる。